

第 94 回日本生理学会大会 男女共同参画推進委員会企画

ランチタイムシンポジウム報告

日本生理学会 男女共同参画推進委員会

【概要】

大会第 1 日: 2017 年 3 月 28 日 (火) 12:00 - 13:00 J 会場にて開催された。プログラムはオーガナイザーを男女共同参画委員長の齋藤康彦先生 (奈良県立医科大学医学部第一生理学教授) と同委員の西谷(中村)友重先生 (国立循環器病研究センター分子生理部 室長) が担当し、シンポジウムの最初に 2016 年 10 月 8 日 (土) ~ 11 月 7 日 (月) に実施された男女共同参画学協会連絡会第 4 回大規模アンケートに関して報告された。日本生理学会会員からは 612 人 (22.4%) の回答が得られ、会員に対する回答率が学協会加盟 92 学会のうち 10 番目であることが報告された。また、前回と今回ともに 20% 以上の回答率を示し、今回の回答数が増加した学会は日本生理学会のみであった。続いて二人のシンポジストの先生方による講演が行われた。一番目は横山詩子先生 (横浜市立大学医学部循環制御医学 准教授) による「継続は力なり~守るものと譲るものは?」、2 番目は荒田晶子先生 (兵庫医科大学生理学生体機能部門 准教授) による「私の歩いてきた道、これからの道」というタイトルで行われた。最後に総合討論が行われ、盛会のうちに終えた。

以下は参加者アンケートの報告である。

【参加人数とその分布】

当日並行して行われたランチョンセミナーは 1 つで、同じ建物内で行われた。準備された軽食は 130 個、男女共同参画推進委員および講演者 11 名、参加者は 121 名 (軽食無の参加 2 名含む) で、うち 89 名よりアンケートの回答をいただいた (図 1)。

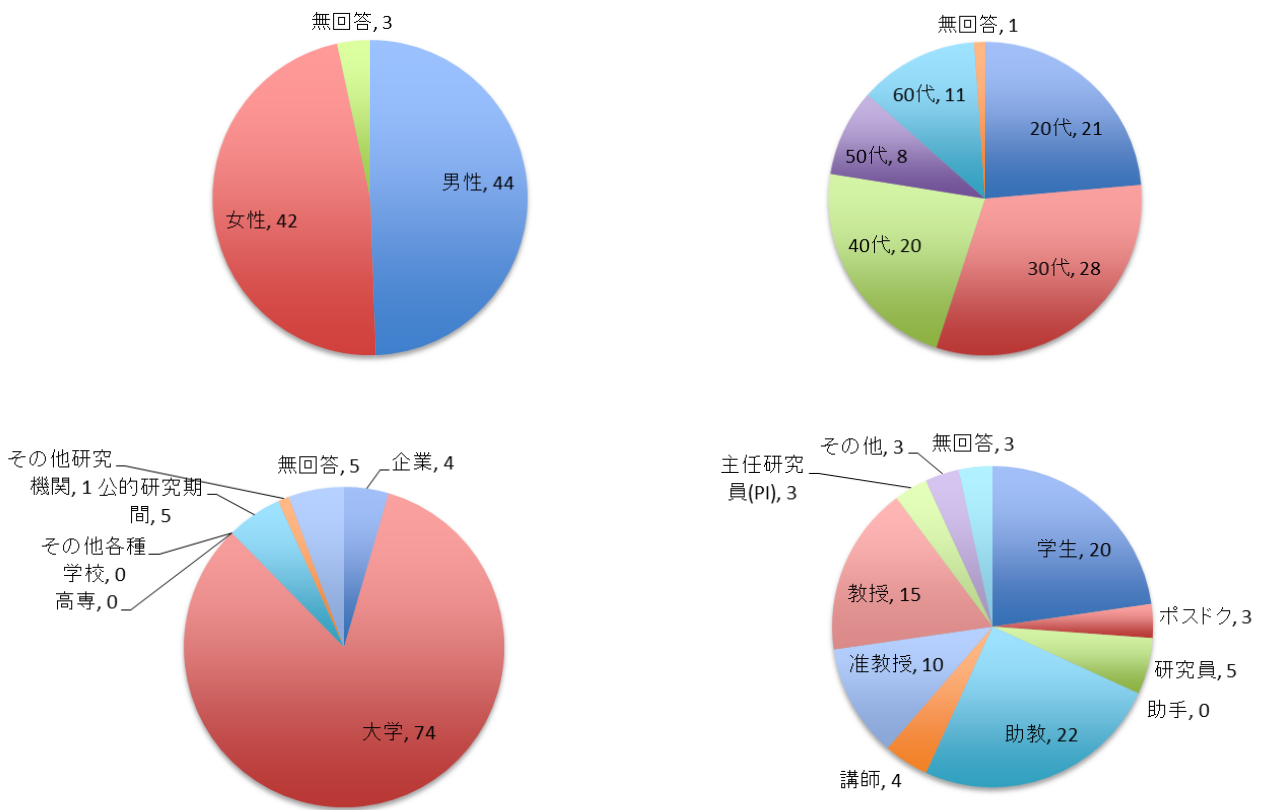
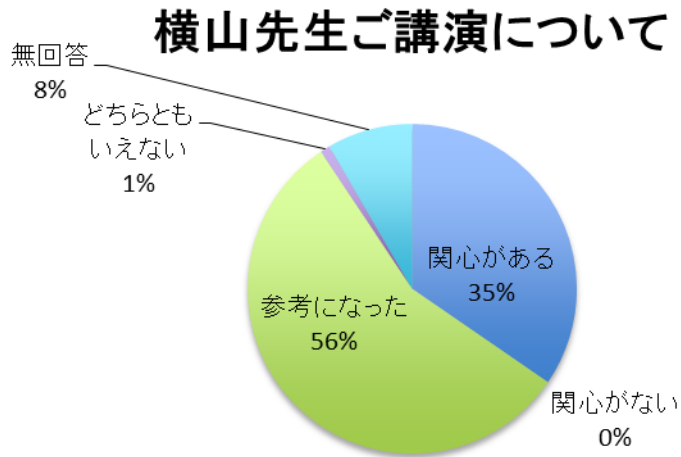


図1. 参加者の分布：左上から性別、年齢、所属機関および職位

男性と女性の比率はほぼ半分、参加した年代は30代が多いが20代から60代まで広範囲であった。83%が大学に所属し、参加者の職位は助教が一番多く、学生、教授、准教授と続いた。様々な職位の研究者がまんべんなく参加したと考えられる。円グラフ内の数字は人数を示す。

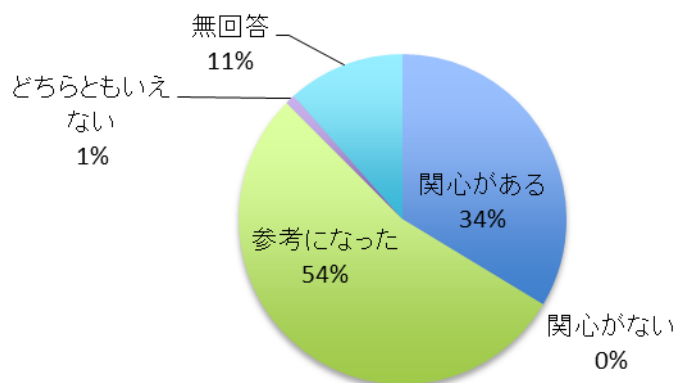
【横山先生のご講演に関して】



具体的な人生のライフイベント（子育て・介護）に対し如何に対処してきたかを講演された。様々なサポートシステムの利用、google カレンダーの利用など、バイタリティあふれる対処方法に触れた講演には「参考になった、共感した、自分の研究生活および子育て、共稼ぎ家庭の在り方の振り返りになった」という意見が多く見られた。また、理解ある指導者がいる環境の重要性、伴侶である男性への働きかけの重要性、周りのサポートシステムの構築の重要性、支援→活躍という視点で考えることの重要性、また個人のバイタリティに関して着目したとの意見があった。一方でこのようにアクティブに対処していけるか不安、あるいは苦勞したくないとの意見も見られた。

【荒田先生のご講演に関して】

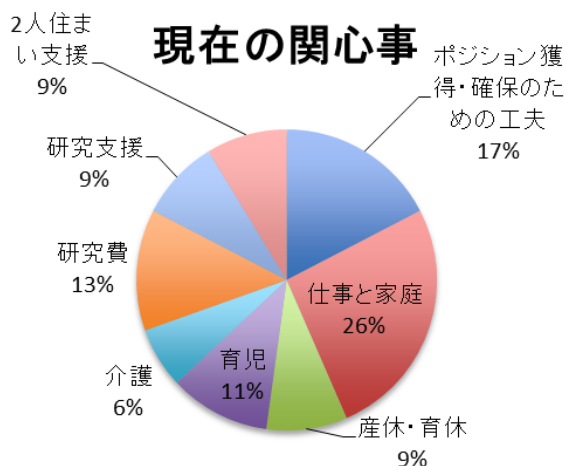
荒田先生ご講演について



荒田先生は「研究歴はお子さんの年齢と同じである」との出だしから始まり、自分の研究および研究手法の確立によるオリジナリティを武器に、大学、研究所と柔軟に研究の場を移動しつつ、研究所での人脈確立の重要性などユーモアたっぷりに紹介された。

参考になったという意見が多く、荒田先生の折々のご意見「研究するなら研究所だね」、柔軟さとポジティブ思考、「No1 でなくてもいい Only One になれ」に触発されたとの意見があった。ターニングポイントとしての留学、出産してから研究を始めるという人生設計というあり方と知ったという意見、荒田先生自身が環境・チャンスに恵まれている、また荒田先生の苦勞を始めて知ったという意見があった。研究者としてのあり方を伺ったとの意見があった。

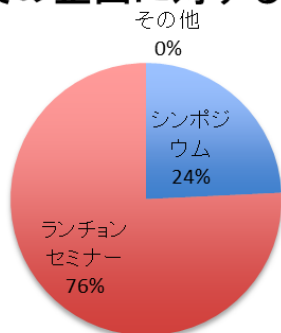
【シンポジウム参加者の現在の関心】



現在の関心は仕事と家庭の両立、ポジション獲得・確保のための工夫、研究費、育児、産休・育休および研究支援および両住まい支援と続いた。介護への関心も見られた。

【今後の男女共同参画推進委員会企画に対する要望】

今後の企画に対する要望



今後の希望する開催形態はランチョンセミナーが76%であった。内容に対する要望として、「男性の立場からの話」を聞きたいとの意見が多く寄せられた（女性研究者を部下にもつ男性研究者、女性研究者を伴侶にもつ男性研究者を含む）。また、ラボ運営する立場としての支援のあり方等を知りたいとの意見、反対に失敗例を知ることによって学びたいとの意見があった。ライフイベントに直面する学生・若手をまとめるPI側の取り組みを知りたい、学生に参加させたい、男女双方の意見を同時に聞きたい、研究人生の後半でライフイベントが来た女性研究者（30～40代後半の女性）の話を要望する意見もあった。今後は、これらの要望をできるだけ取り入れた形でのシンポジウムを企画していきたい。